

# 成功時の誇り・羞恥経験の文化差に対する 関係流動性の媒介効果<sup>1</sup>

前田 友吾<sup>2,3</sup> 結城 雅樹 北海道大学

Mediating effects of relational mobility on cultural differences in pride and embarrassment in success

Yugo Maeda and Masaki Yuki (Hokkaido University)

Previous research has found that, in successful situations, East Asians tend to feel less pride and greater embarrassment than Westerners. From a socio-ecological perspective, we propose that these cultural differences in self-conscious emotions after success could be due to cross-societal differences in the expected reward or punishment that others would assign to the actor for high achievement, which in turn stems from different levels of relational mobility. Supporting our theory, a vignette study with American and Japanese participants showed that (a) Japanese felt more embarrassment and less pride in successful situations than Americans; (b) the cultural differences in embarrassment were mediated by relational mobility and the expected punishment for high achievers; (c) the indirect effect of relational mobility and the expected reward for high achievers on pride was in the predicted direction but was not significant.

**Key words:** relational mobility, pride, embarrassment, self-conscious emotion, culture.

*The Japanese Journal of Psychology*

2023, Vol. 94, No. 5, pp. 402-412

J-STAGE Advanced published date: September 1, 2023, <https://doi.org/10.4992/jjpsy.94.22032>

本研究の目的は、人が他者の面前で成功した状況で経験する感情——特に誇りと羞恥——に文化差がみられる原因を、社会生態心理学の視点から明らかにすることである。先行研究では、西洋人は東アジア人より成功時に誇りを感じやすい一方、東アジア人は西洋人より羞恥を感じやすいことが示されてきた。本研究では、この文化差を生み出す社会環境要因として関係流動性および社会的評判の獲得または回避に関する適応課題の違いに着目し、それらが人々の成功時の誇り感情と羞恥感情の感じやすさに影響するという仮説を、国際比較研究を通じて検討する。

## 研究の背景

他者の面前で何らかの成功や達成を収めたとき、人はどのような感情を経験するだろうか。その代表的なものに誇り (pride) がある。誇りとは、自身の性質や能力によって成功を収めたときに経験される感情であり (Sznycer, 2019; Tracy et al., 2010)、達成感や自信と関連する肯定的な感情である (Tracy & Robins, 2007)。誇り感情は自尊心と正の関連を持ち (Brown & Marshall, 2001)、また、誇り感情を表出する人は、それを観察した他者から高い社会的地位を持つと評価されやすい (Shariff et al., 2012; Shariff & Tracy, 2009)。このように、主観経験においても、社会的帰結においても、誇りは「肯定的な」感情であるといえる。

一方、人前での成功場面で経験されることが知られるもう一つの感情に羞恥 (embarrassment) がある。羞恥は否定的な感情であり、社会的規範から逸脱した時や、相手との相互作用に混乱をきたした時などに経験されやすい (Feinberg et al., 2012; Miller, 1996; Silver et al., 1987; 菅原, 1998)。羞恥が経験される典型的な場面は、知人の名前を忘れてしまったり、人前で転んでしまったりというような、公共の場での失敗場面で

Correspondence concerning this article should be sent to: Yugo Maeda, Department of Behavioral Science, Graduate School of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University, Kita-10, Nishi-7, Kita-ku, Sapporo 060-0810, Japan. (E-mail: med-yugo31@eis.hokudai.ac.jp)

<sup>1</sup> 本研究にあたり JSPS 科学研究費補助金 (JP19H01745) の助成を受けた。

<sup>2</sup> 本研究に関してご助言をいただいたオックスフォード大学／立教大学のクリストファー・カヴァナ氏、北海道大学のジェイソン・フリーマン氏に感謝申し上げます。

<sup>3</sup> 日本学術振興会特別研究員 (DC1)

ある (Miller, 1996)。しかし、羞恥は必ずしも失敗状況のみではなく、人前で何かを達成したり、他者から称賛を受けるなどの成功状況でも経験される (Feinberg et al., 2012; Lewis et al., 1991; Lewis & Ramsay, 2002)。例えば、Lewis et al. (1991) は、実験課題に成功した幼児が、実験者から過剰に褒められると羞恥を表出することを報告している。

先行研究では、成功時の誇り表出が文化普遍的にみられる一方で (Tracy & Matsumoto, 2008)、その感じやすさや頻度に文化差があることが示されてきた。例えば、Stoeber et al. (2013) は、仮想的な成功場面で、英国人は日本人よりも誇りを感じやすく、一方の日本人は英国人よりも羞恥を感じやすいことを見出した。また、アメリカ人と日本人の就学前幼児の課題成功時の感情表出を比較した Lewis et al. (2010) は、アメリカ人幼児は日本人幼児より高い頻度で誇り表情を示す一方、日本人幼児はアメリカ人幼児より、高い頻度で羞恥表情を示すことを見出した。このように、全般的に、他者の面前での成功時に、西洋人は誇りを、東アジア人は羞恥を感じやすいと言える。

それでは、このように成功時の感情経験に文化差があるとすれば、その原因はどこにあるのだろうか。先行研究は、その原因を文化的自己観の違いに求めている (Lewis et al., 2010)。文化的自己観とは、それぞれの社会で歴史的に育まれ、継承されてきた自己の存在に関する共有信念であり、西洋と東洋では異なる (北山, 1995)。西洋では自己は他者や社会的文脈から独立した存在であるとする相互独立的自己観が優勢である一方、東洋では自己と他者とが相互依存関係にあるとする相互協調的自己観が優勢である (Markus & Kitayama, 1991)。成功場面の一つの特徴は、周囲の人間と自己との間の違いを際立たせることである。このような場面で経験される誇りは、肯定的な感情であるとともに、自己を他者から切り離し、自己の独自性を際立たせる対人脱関与的感情 (Kitayama et al., 2000, 2006) である。そのような性質を持つ誇りは、他者との協調関係を重視する相互協調的文化において否定的にみなされる (Eid & Diener, 2001)。一方、相互協調的文化の人々が成功時に羞恥を経験しやすい理由は、成功が自己を集団の一員としてではなく、独立した個人として目立たせてしまうためである (Lewis et al., 2010)。

だが、これらの説明には二つの弱点がある。第一は、近年発展の著しい感情の適応機能に注目した説明がなされていない点である。この観点によると、感情の適応機能とは、所与の自然環境や社会環境の下で対処が求められる適応課題の解決を助けることである。いわゆる「感情に支配された行動」を取ることは、その個人に高い適応度をもたらす (例えば、Frank, 1988 山岸 監 訳 1995; Keltner & Gross, 1999; Keltner & Haidt, 1999; 北村・大坪, 2012)。感情の機能に関するこうし

た適応論的分析は、近年は特に、誇り、羞恥、恥 (shame)、罪悪感 (guilt) といった自己意識的感情 (self-conscious emotion) にも拡張されてきた (例えば、Sznycer, 2019; Sznycer et al., 2017, 2018; Tracy et al., 2010)。これによると、自己意識的感情の持つ中心的な機能は、自己の社会的評価、すなわち評判に関する問題解決である (Sznycer, 2019)。では成功場面において感じられる誇りや羞恥が社会によって差があるとは一体どういうことだろうか。本研究は、その問題の答えを適応すべき環境である社会の性質の違いに求めることにより、適応デバイスとして自己意識的感情を捉え、文化差を生む機能的メカニズムを明らかにする。

先行研究の説明の第二の弱点は、他の文化差研究との理論的一貫性の欠如である。先述のように、先行研究では、西洋人が成功時に誇りを感じやすい理由は、それが脱関与的感情であり、他者から自己が独立していることを確認できるためだと説明されていた。しかし一方、他の文化心理学研究では、他者とのつながりを積極的に強めるような感情経験は、「相互協調的」とされる東アジア人よりも、「相互独立的」とされる西洋人のほうがむしろ強いことが示されてきた (Kito et al., 2017 によるレビュー参照)。例えば、山田他 (2015) は、日本人よりカナダ人の方が、友人関係・恋人関係のいずれにおいてもパートナーに対して強い親密性を感じることを見出した。共感性に関しても、東アジア人に比べて西洋人の方が、共感的配慮を経験しやすいとの文化差が示されている (Birkett, 2013; Cassels et al., 2010)。詳しくは後述するが、Kito et al (2017) は、個人の自律性が高い社会環境ほど、こうした他者との関係性を積極的に強めるための感情を経験する必要性が高いと論じている。これを踏まえると、西洋人が成功時に誇りを経験しやすいことや、東アジア人が羞恥を経験しやすいこともまた、彼らが他者との関係性の中で適応的に振る舞うための機能を持つと解釈することができるかもしれない。以上の二つの発想に基づき、本論文では、成功時に経験される誇りと羞恥が、それぞれ異なる性質を持つ社会環境の下で当該個人の適応度を上昇させる機能を持つとの新しい仮説を提唱する。

## 理論仮説

**社会生態学的アプローチ** 本研究の仮説が依拠するのは、社会生態心理学 (Socio-ecological psychology; 例えば、Nisbett & Cohen, 1996 石井・結城訳 2009; Oishi & Graham, 2010; Uskul & Oishi, 2020; 山岸, 1998) の視点である。先述のように、適応論の視点によれば、感情は、社会的・物理的環境における適応問題を解決するための機能的なツールである (Keltner & Gross, 1999; Keltner & Haidt, 1999; 北村・大坪, 2012)。それぞれの社会には、特定の行動パターンやそれを生み出す

心理傾向を有利または不利にする誘因構造がある (Oishi & Graham, 2010; 山岸, 1998)。したがって、異なる社会に住む人々が異なる心理傾向を示す場合、それはそれぞれの社会にある誘引構造の違いを反映していると推察される。本研究では、成功時の誇りと羞恥が、各社会環境における適応課題を解決する機能を持つという前提に立ち、これらの感情の文化差を予測する。

**誇りの機能** 自己意識の感情としての誇りと羞恥には、それぞれどのような適応機能があるのだろうか。まず、誇りには、自身の社会的地位をさらに向上させ、また周囲の他者を惹き付ける機能がある (Sznycer, 2019; Tracy et al., 2010, 2020)。この目標が達成される過程には、大きく分けて二種類がある。第一は、成功時の誇り経験が、当該の個人がさらなる成功を追求するよう動機づけることである (Williams & DeSteno, 2008)。誇りは快を伴う感情であるため、それを再び経験させるような行動、すなわち成功に向けての努力を動機付ける。このような正のフィードバックループを通じて、誇りの経験は、更なる成功を通じた高い社会的地位と評判を得ることにつながる (Sznycer, 2019; Tracy et al., 2010, 2020)。

第二は、誇り感情の表出が、他者に対して自己の社会的地位や価値を印象付けることである (Tracy et al., 2010)。実際、誇りを非言語的に表出する人は、そうしない人と比べて、より高い社会的地位にある人だと思われるやすい (Shariff et al., 2012)。以上のように、誇り経験は、自らの社会的地位を向上させることを通じて、より良い評判と対人関係の獲得につながるのである。

**羞恥の機能** 一方、羞恥が経験されやすい典型的な状況の一つは、人前での失敗である。こうした状況での羞恥は、社会的評判の低下を回避させ、回復をもたらす (Harris, 2006; Keltner & Anderson, 2000)。失敗時に羞恥を経験することが評判低下の回避や回復に役立つ第一の理由は、羞恥は不快な情動を伴う否定的な感情経験であるため、同様の失敗を将来的に繰り返さないよう自己の行動を制御することを通じて、本人もしくはその周囲の人々が被った社会的ダメージの回避を促すからである (Harris, 2006)。羞恥は、このような負のフィードバックループを通じて否定的な評判を回避するとともに、社会的ダメージを回復する行動を動機づけることで、良好な社会的関係の維持に役立つと考えられる。

失敗時に羞恥が経験される第二の理由は、羞恥感情の表出が、自身の社会的規範からの逸脱を自覚していることや、その規範にコミットしていることを他者に伝えるシグナルとして機能するからである。実際、羞恥の表出者は、非表出者と比べ、他者から肯定的に評価されたり、向社会的だと評価される (de Jong, 1999; Feinberg et al., 2012; Semin & Manstead, 1982)。

それでは、本来望ましいはずの成功状況で人がしば

しば羞恥感情を経験するのはなぜだろうか。それは、成功状況では、周囲の他者たちから、肯定的な評判だけではなく、否定的な評判も受けうるからである。優れた成功を収めた人や周囲の他者から突出して望ましい行動をする人物は、他者から必ずしも好意的に評価されず、妬みや否定的評価を受けることがある (Kawamura & Kusumi, 2020; Lange & Crusius, 2015; Parks & Stone, 2010; Pleasant & Barclay, 2018)。例えば、Lange & Crusius (2015) は、人々が成功者に対して否定的評価を含む妬み (malicious envy) を感じることを見出している。また、知人よりも優れた結果を残した人が、しばしば誇り感情の表出を抑制することも示されている (van Osch et al., 2019)。

**関係流動性と適応課題** ここまで整理した誇りと羞恥の適応機能をふまえると、成功時の誇りと羞恥の文化差の原因はどのように説明できるだろうか。本研究では、成功後の感情経験の文化差を生み出す社会生態学的要因として、関係流動性に注目する。関係流動性とは、当該の社会における、個人の選好に応じた対人関係の形成や、既存関係の維持・解消の自由度を意味する (Thomson et al., 2018; Yuki & Schug, 2012, 2020)。関係流動性は、近年、さまざまな心理・行動傾向の文化差を理論的・実証的に説明できる要因として注目されている (レビューとして Kito et al., 2017; Yuki & Schug, 2012, 2020 を参照)。北米や西欧諸国を代表とする高関係流動性社会では、人々が新たな対人関係や集団を形成したり、新しい対人関係や集団に移動したりする機会が豊富に提供されており、自身の選好に応じて対人関係や所属集団を選択・変更する自由度が高い (Yamagishi & Yamagishi, 1994)。一方、東アジアや西アフリカ諸国を始めとした低関係流動性社会では、人間関係や所属集団が比較的固定的であり、個人が自身の選好に応じて、対人関係や集団を離れたり入れ替えたりできる自由度が低い (Adams et al., 2004; Yamagishi et al., 1998)。

社会環境の関係流動性の違いは、個人が社会生活の中で対処することが求められる適応課題の違いをもたらす。関係流動性の高い社会における主な適応課題は、社会から自己に向けられる肯定的評価、すなわちポジティブ評判の獲得を通じて、望ましい人間関係を獲得し、維持することである。高関係流動性社会では、新たな出会いの機会が豊富で、対人関係選択の自由度が高い一方で、それゆえに、望ましい対人関係を獲得・維持するための競争が激しい。こうした競争に勝つための方略の一つが、自己の優れた資質や望ましい行動を他者に対して積極的に誇示し、ポジティブ評判を獲得することである (Barclay, 2013; Kito et al., 2017)。もしこれに失敗すると、既存の対人関係のパートナーや、将来の潜在的パートナーを、競争相手に奪われる可能性が高くなる。そのため、高関係流動性社会の人々は、



自己に関するポジティブ評判の獲得を促す心理・行動傾向が形成される。

一方、低関係流動性社会の主な適応課題は、周囲から自己に向けられた否定的な評判、すなわちネガティブ評判を受ける可能性を減少させ、現存の対人関係の悪化を避けることである（Hashimoto & Yamagishi, 2016; Yamagishi et al., 2008）。低関係流動性社会の対人関係は固定的であり、代替が難しい。ここで否定的な評判を受け、対人関係が悪化すると、関係が悪化したまま暮らさなければならなかったり、ついには既存の対人関係や集団から排除され、代替的な関係や集団を見つけられず孤立状態に陥ったりする（Kito et al., 2017）。そのため、低関係流動性社会の人々は、自己に対するネガティブ評判の回避を促す心理・行動傾向が形成される。

**各関係流動性下での適応デバイスとしての誇り・羞恥感情** 以上の高関係流動性社会と低関係流動性社会における主要な適応課題の違いを踏まえると、他者の面前での成功時に感じる自己意識的感情の程度が異なることが予想される。まず、ポジティブ評判獲得が主たる適応課題である高関係流動性社会では、成功時に誇りを体験することが低関係流動性社会よりも適応的であろう。なぜならば、先述のように、誇り経験は、その経験者にさらなる成功に向けた動機づけを高めたり、自己の功績や優秀性を他者に対して効果的にアピールさせたりすることを通じて、より望ましい対人関係の獲得・維持につながるからである。

一方、ネガティブ評判の回避が優勢な適応課題である低関係流動性社会においては、成功時に羞恥を感じることがより適応的となるだろう。先述のように、成功を収めることは、しばしば周囲の他者から規範逸脱とみなされたり、妬みの対象となったりする。ここで羞恥を感じ、表出することは、自らが成功を過度に繰り返してさらなる妬みを招くことを回避させたり、他者に対して、自らがその規範逸脱を認識していることを表明させたりする（Feinberg et al., 2012; Harris, 2006; Keltner & Anderson, 2000; Semin & Manstead, 1982）。これを通じて、成功時の羞恥の経験・表出者は、代替の困難な対人関係の悪化を避けることができる。

以上をまとめると、本研究の理論仮説は以下のとおりとなる。まず、ポジティブ評判の獲得が主な適応課題である高関係流動性社会の人々は、低関係流動性社会の人々に比べ成功時に誇りを感じやすいだろう。それは、誇りに伴う快感情がさらなる成功追求を動機づけるとともに、誇りの表出が周囲からの肯定的な評価を増大させるため、ポジティブ評判の獲得という適応課題の達成につながるからである。一方、ネガティブ評判の回避が主な適応課題である低関係流動性社会の人々は、高関係流動性社会の人々に比べ成功時に羞恥を感じやすいだろう。それは、羞恥に伴う不快感情が、

周囲からの妬みを招く過度の成功を回避させるとともに、羞恥の表出が周囲からの否定的な評価を減少させるため、ネガティブ評判の回避という適応課題の達成につながるからである。

なお、本研究の理論は、誇り経験と羞恥経験が二律背反の感情経験ではなく、共起しうる感情であることを前提としている。例えば、低関係流動性社会の人々が、成功時に羞恥を経験することに伴って誇り経験が減少するとは想定していない。あくまでも関係流動性は、それぞれの感情経験に対して個別に影響し、その両者が個人内で調整された結果、適応行動が促進されたり、非適応的な行動が抑制されたりするという想定である。この理論的前提を支持する研究の一つとして、ポジティブ感情とネガティブ感情の共起を扱った mixed emotion の研究が挙げられる（Miyamoto et al., 2010）。関係流動性によって、各感情経験の強さが異なることで、成功追求行動や成功のディスプレイの促進や抑制の程度が変化することを理論的に想定している点に留意されたい。

## 研究の概要と予測

本研究では、以上の仮説を検証するため、数多くの先行研究で関係流動性の差が示されてきた日本とアメリカ（例えば、Thomson et al., 2018）の間で国際比較研究を行った。まず、先行研究で観察された成功状況での羞恥と誇りの日米差が再現されることを確認した上で、この文化差が、両国の参加者が暮らしている局所的な社会環境の関係流動性知覚の違いによって媒介されるかを検証した。参加者の局所的な環境の関係流動性は、先行研究で広く使われてきた関係流動性尺度（Yuki et al., 2007）を用いて測定した。またこれらに加え、関係流動性がどのようなメカニズムを通じて誇りと羞恥に影響を与えるのかを検討した。具体的には、成功者に社会から与えられる報酬と罰への信念の媒介効果を検討した。

検証した予測は以下の四点である。第一に、先行研究と一貫して、成功状況では、アメリカ人は日本人より強い誇りを感じる一方、日本人はアメリカ人より強い羞恥を感じるだろう。第二に、局所的な環境の関係流動性知覚は、先行研究と一貫して、アメリカ人は日本人より高いだろう。第三に、成功者が社会的な報酬を受けるという信念はアメリカ人が日本人より強く、一方で成功者が社会的に罰を受けるという信念は日本人がアメリカ人より強いだろう。なぜならば、関係流動性の異なる社会では、積極的にポジティブ評判を獲得すべきか、それとも積極的にネガティブ評判を回避すべきかという適応課題が異なるため、成功者が周囲の他者から受ける社会的報酬もしくは社会的罰を過大視すると予想されるからである（山本・結城, 2019）。第四に、誇りと羞恥の日米差は、各個人が置

Table 1

成功状況の誇り・羞恥で用いた成功場面の一覧

項目
1 学校の試験でクラス一番の成績を取り、そのことを同級生たちに知られた。
2 職場のパーティーに参加したところ、同僚たちの中で自分が一番素敵な服装をしていると誰かに指摘された。
3 学校の体育の授業で短距離走をしたところ、クラスで一番だった。
4 皆で作業しているとき、自分が誰よりも貢献していることに周囲の人たちが気付いた。
5 レストランで誰かが落としたコップを私が上手にキャッチしたところを、周囲の人たちが見た。
6 職場でよい業績を上げて、他の同僚たちの前で上司に褒められた。

かれているローカルな社会環境の関係流動性知覚の違いと、成功者が社会的報酬を受けるか罰を受けるかという信念の違いによって説明されるだろう。すなわち、成功状況における羞恥と誇りの文化差は、関係流動性の違いが成功者に対する社会的賞罰それぞれに関する信念の違いを説明し、それらの違いが羞恥と誇りの程度と関係していることにより説明されるだろう。

## 方 法

参加者は、日米のインターネットクラウドソーシングサイト（日本：Lancers；アメリカ：Amazon Mechanical Turk）で各 250 名ずつを募集した。募集広告を見て関心を持った参加者は、オンラインアンケートツールである Qualtrics 上に作成された web 質問紙へ進み、調査内容の事前説明に同意した者のみが質問に回答した。回答データの分析に先立ち、予め定めた基準により、日米各国以外に在住の者、母国語が日本語または英語以外の者、回答時間が中央値の 3 割以下だったものを分析から除外した。最終的な分析対象者は、日本人 206 名、アメリカ人 220 名であった。使用したデータ、測定尺度および分析コードは、OSF ([https://osf.io/3kjwh/?view\\_only=8c977f316d4b44658b8ed40f24c9b0b5](https://osf.io/3kjwh/?view_only=8c977f316d4b44658b8ed40f24c9b0b5)) で公開している。本研究は、北海道大学社会科学実験研究センターの倫理委員会の承認を得て実施された（承認番号：No. 30 年度-14）。

## 測定尺度

参加者は、以下の質問紙尺度に回答した。また、全ての項目で、尺度得点として項目の平均値を用いた。

**関係流動性尺度** 参加者を取り巻く局所的な社会環境での対人関係選択の自由度を測定するための 12 項目の尺度である（Yuki et al, 2007）。この尺度は、参加者の周囲の人々に関して、見知らぬ他者との新たな出会いの機会の多寡、および所属する集団や対人関係の選択と離脱の自由度を尋ねている。具体的には、関係流動性尺度は以下の二つの下位次元に分けられる。一つは、それまで面識のなかった他者と新しく出会う機会の多寡、つまり「新規出会いの機会」である。もう

一つは、対人関係を個人の意思に基づいて自由に形成・解消できるかどうかという「関係形成・解消の自由度」である。関係流動性尺度にはこれらの 2 因子があり、互いに正の関連を持つことが、多数の先行研究で示されてきた（例えば、Thomson et al, 2018; Yuki et al, 2007）。本研究でもこれらの 2 因子は  $r = .61, p < .001$  と正相関していた。新規出会いの機会の項目例は「彼ら（あなたの周囲にいる人々）には、人々と新しく知り合いになる機会がたくさんある。」、関係形成・解消の自由度の項目例は「彼らは、ふだんどんな人たちと付き合うかを、自分の好みで選ぶことができる。」があげられる。それぞれ 6 点尺度（1：全く当てはまらない—7：非常に当てはまる）で回答を求めた。信頼性は、日本で  $\alpha = .85$ 、アメリカで  $\alpha = .87$  であった。

**成功状況の誇り・羞恥** 人前で成功を収めた 6 つの仮想的場面をオリジナルで作成した（Table 1）。場面作成に際して、公的状況で、自らの優れた性質やパフォーマンスが周囲の人の目に触れた場面を一貫して想定した。職場や学校など幅広い社会状況を設定し、高い能力や協力的行動など、社会的に望ましいとされる達成場面を設定した。参加者は、それぞれの場面で自分自身が誇りと羞恥をどの程度感じるかを予想し、それぞれ 7 点尺度（1：全く感じない—7：非常に感じる）で回答した。いずれの感情に関する回答も 6 場面間で十分に整合性が高かったため（羞恥：日本： $\alpha = .85$ ；アメリカ： $\alpha = .90$ ；誇り：日本： $\alpha = .86$ ；アメリカ： $\alpha = .89$ ）、以下の分析では 6 場面の平均を誇り得点および羞恥得点として用いた<sup>4</sup>。

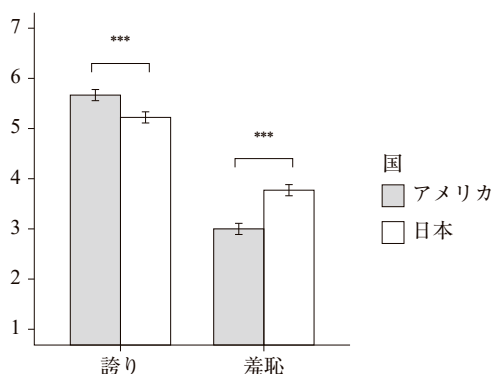
**成功賞罰信念尺度** 当尺度は、自己が暮らす社会で成功者がどのような社会的フィードバックを受けているかに関して参加者が持つ信念を測定するために、本研究で作成した。これは、高い地位にいる人、すなわち「出る杭（Tall Poppy）」への態度を測定するために作られた Tall Poppy 尺度（Feather, 1989）をもとにし

<sup>4</sup> 誇り経験と羞恥経験の各 6 場面、合計 12 項目に対してプロマックス回転による最尤法を用いた因子分析を行ったところ、日米ともに 2 因子に分かれ、誇りと羞恥の弁別性が確認された。このことから、誇り経験と羞恥経験は二律背反の感情経験ではないことが推察される。

Table 2  
成功賞罰信念尺度の一覧

項目
1 私の社会では、とても成功している人々は、周囲の人たちからしばしば批判されたり、叩かれたりする。(成功罰)
2 私の社会では、とても成功している人は、その功績をみんなの前で褒められる。(成功賞)
3 私の社会の人々は、大きな成功を収めた人を尊敬したり、友人になりたがったりする。(成功賞)
4 私の社会の人々は、大きな成功を収めた人をしばしば避けようとする。(成功罰)
5 私の社会では、周囲の人たちよりも社会的にとても成功しているように見えると損をする。(成功罰)
6 私の社会では、周囲の人たちよりも非常に成功している人は得をする。(成功賞)

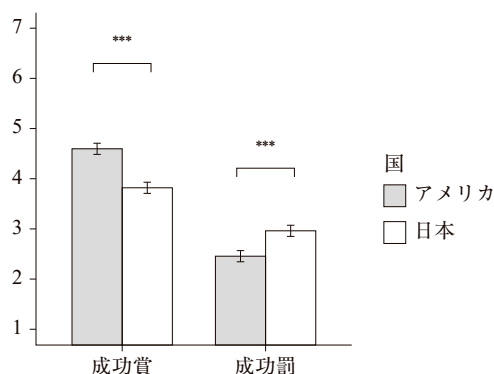
Figure 1  
誇り感情と羞恥感情の日米差



注) エラーバーは標準誤差を表す。

\*\*\* $p < .001$ .

Figure 2  
成功賞罰信念の文化差



注) エラーバーは標準誤差を表す。

\*\*\* $p < .001$ .

たものである。プロマックス回転を用いた最尤法による因子分析を行った結果、日米ともに、尺度項目は、成功者が報酬や称賛を受けているという「成功賞信念」と、成功者が罰や批判を受けているという「成功罰信念」の二つの下位因子に分かれた<sup>5</sup>。因子分析の結果はOSFに示した。成功賞信念は「私の社会では、とても成功している人は、その功績をみんなの前で褒められる。」など3項目で、成功罰信念は「私の社会では、とても成功している人々は、周囲の人たちからしばしば批判されたり、叩かれたりする。」など3項目で測定された（選択肢は、1：全く当てはまらない—7：非常に当てはまるの7点尺度）。全項目はTable 2に示し

た。信頼性は、成功賞信念では、日本： $\alpha = .59$ 、アメリカ： $\alpha = .74$ であり、成功罰信念では、日本： $\alpha = .67$ 、アメリカ： $\alpha = .81$ であった。

**デモグラフィック項目** 参加者の性別、年齢、国籍、母国語、現在の居住地域などを尋ねた。

## 結 果

**成功状況での誇り・羞恥感情の日米差** 成功状況での誇り感情と羞恥感情・関係流動性の日米差を検討したところ、いずれも、先行研究と一貫する予測通りの結果が得られた。成功状況での誇りは、アメリカ人が日本人より感じやすい一方（アメリカ： $M = 5.63$ ,  $SD = .98$ , 日本： $M = 5.19$ ,  $SD = .98$ ,  $t(426.97) = 4.66$ ,  $p < .001$ ,  $d = -.46$ ）、羞恥は、日本人がアメリカ人より感じやすかった（アメリカ： $M = 3.05$ ,  $SD = 1.53$ , 日本： $M = 3.76$ ,  $SD = 1.31$ ,  $t(426.84) = -5.24$ ,  $p < .001$ ,  $d = .50$ ) (Figure 1)。

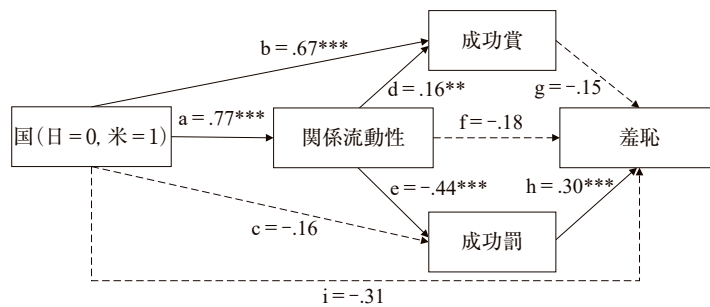
**関係流動性の日米差** 次に、関係流動性に先行研究と一貫した日米差がみられたのかを検討するため、対応のない  $t$  検定を行った。その結果、先行研究と一貫して関係流動性知覚は、アメリカ人が日本人より高かった（アメリカ： $M = 4.31$ ,  $SD = .74$ , 日本： $M = 3.56$ ,  $SD = .67$ ,  $t(428) = 11.03$ ,  $p < .001$ ,  $d = -1.09$ ）。

**成功賞罰信念の日米差** 次に、成功賞罰信念の日米

<sup>5</sup> 成功賞罰信念について測定不変性を確認するため、確証的因子分析を多母集団同時分析によって行った。その結果、日米の成功賞罰信念の因子構造には弱不変性が認められたが、一方で強不変性は認められなかった。そのため、弱不変性モデルを基準として、部分的強不変性を検討した結果、成功賞の3項目と、成功罰の1項目を残した尺度が抽出された ( $\Delta CFI < 0.01$ )。ただし、基準のモデルとして構成モデルを用いた場合、成功賞3項目と、成功罰2項目のモデルでも、部分的強不変性が認められた ( $\Delta CFI < 0.01$ )。これらの項目を用いて、本研究と同様の分析を行った結果、基本的に同じパターンが見られた。そのため、本論文では結果として示す際に成功賞3項目と、成功罰3項目を用いた。以上の分析の詳細はOSFの分析コードに記載した。

Figure 3

羞恥の文化差に対する関係流動性および成功賞 (adg)・成功罰信念 (ach) の媒介効果



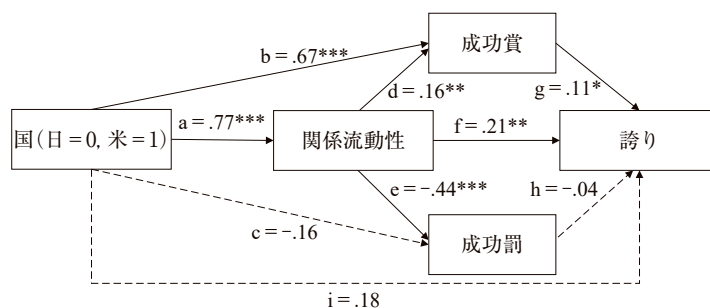
間接効果：adg = -.02 (95 %CI: -.05, .003), ach = -.10 (95 %CI: -.19, -.04)

注) 係数は全て非標準化係数を表す。

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ .

Figure 4

誇りの文化差に対する関係流動性および成功賞 (adg)・成功罰信念 (ach) の媒介効果



間接効果：adg = .01 (90 %CI: .001, .03), ach = .01 (90 %CI: -.01, .05)

注) 係数は全て非標準化係数を表す。

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ .

差について検討した。成功賞罰信念尺度の下位因子である成功賞信念および成功罰信念に関して、国を独立変数とした  $t$  検定を行った。その結果、予測と一貫して、成功賞信念はアメリカ人の方が、成功罰信念は日本人の方が高かった (成功賞：アメリカ： $M = 4.58$ ,  $SD = .92$ , 日本： $M = 3.81$ ,  $SD = .78$ ,  $t(424.50) = 9.29$ ,  $p < .001$ ,  $d = -.92$ ; 成功罰：アメリカ： $M = 2.51$ ,  $SD = .81$ , 日本： $M = 2.96$ ,  $SD = 1.09$ ,  $t(410.77) = -4.85$ ,  $p < .001$ ,  $d = .52$ ) (Figure 2)。

**成功状況での誇り・羞恥の日米差に対する関係流動性と成功賞罰信念の媒介効果** 最後に、成功状況羞恥・誇りの日米差に対する関係流動性と成功賞罰信念の媒介効果を検討した。独立変数を国 (日本 = 0, アメリカ = 1), 従属変数を成功状況の誇り・羞恥, 第1段階の媒介変数を関係流動性, 第2段階の媒介変数を成功賞信念および成功罰信念として, SPSP の PROCESS マクロ Version 4.1 (Hayes, 2017) のモデル 81 を用いて, ブートストラップ法によるパス解析を行った。パス解析に用いた媒介変数および従属変数間の単相関に関しては, OSF にて報告している。その結果, まず, 成

功状況羞恥に関しては, 国が関係流動性と成功罰信念を通じて成功状況羞恥に与える間接効果が有意であった ( $b = -.103$ ,  $BootSE = .038$ , 95 %CI [-.186, -.041])。一方で, 成功賞信念を経由した間接効果は有意ではなかった (Figure 3)。つまり, アメリカ人より日本人で関係流動性認知が低く, 関係流動性認知が低いほど成功罰信念が高く, 成功罰信念が高いほど成功状況羞恥が高いという予測通りの結果であった。

次に, 成功状況誇りについては, 国が関係流動性と成功賞信念を経由して成功状況誇りに関連する間接効果が有意傾向であった ( $b = .014$ ,  $BootSE = .011$ , 90 %CI [.001, .033])。一方で, 成功罰信念を経由した関連は有意ではなかった (Figure 4)。すなわち, 日本人よりアメリカ人で関係流動性認知が高く, 関係流動性認知が高いほど成功賞信念が高く, 成功賞信念が高いほど成功状況での誇りが強いという予測どおりのパターンは見られたものの, 間接効果は有意でなかった。

## 考 察

本研究の目的は, 他者の面前での成功時に人が経験



しやすい感情に文化差がある原因を、社会生態学的アプローチの観点から解明することであった。日本人成人とアメリカ人成人を対象とした国際比較調査の結果、予測と一貫して以下の結果が示された。(a) 先行研究と一貫して、仮想的な成功場面で、アメリカ人は日本より誇りを感じやすいと答える一方で、日本人はアメリカ人より羞恥を感じやすいと答えた。(b) 参加者が暮らす局所的な環境の関係流動性知覚は、先行研究と一貫してアメリカ人の方が日本人より強かった。(c) 社会的成功者に対して他者から報酬や賞賛が寄せられるだろうという成功賞信念は、アメリカ人は日本人より強かった。一方、社会的成功者に対して罰や批判が寄せられるだろうとの成功罰信念は、日本人の方がアメリカ人よりも強かった。(d) さらに、成功場面羞恥の日米差は、関係流動性の低さと、それに伴う成功罰信念によって媒介された。(e) 一方、成功場面誇りの日米差を、関係流動性の高さと成功賞信念によって説明する間接効果は有意傾向にとどまった。

以上の結果は、羞恥は低関係流動性社会での適応感情であるとした本研究の仮説を支持している。つまり、ネガティブ評判回避の適応価が高い低関係流動性社会では、成功時に競争意図の露見や、さらなる成功追求を抑制する機能を持つ羞恥経験が強く経験されやすい。一方、誇りに対する関係流動性と成功賞信念の間接効果は予測通り正の関連を示したが、有意傾向にとどまった。

本研究の結果には、少なくとも以下の二つの研究分野に対して理論的な貢献がある。1点目は、感情研究に対する貢献である。本研究の結果は、成功時に経験される自己意識的感情である誇りと羞恥のそれぞれに、社会環境の性質によって異なる社会的適応基盤があり、それゆえにそれぞれの経験されやすさに社会差が生じうるとの仮説を概ね支持するものであった。ただし誇りに対する間接効果は予測通りの方向ではあったものの有意傾向にとどまった。感情に対する適応論・機能論的分析は、誇り、羞恥、恥 (shame)、罪悪感 (guilt) といった自己意識的感情でも用いられている (例えば、Sznycer, 2019; Sznycer et al., 2017, 2018)。これらの分析では、様々な感情が物理的環境や社会環境に内在する適応課題を解決するための機能を持つとの前提が置かれてきた。しかし、少なくともこれまでの自己意識的感情研究では、適応の対象となる社会生態学的环境の多様性とそこから生じる感情経験の違いを検討した研究は非常に少ない (例外として、Sznycer et al., 2012)。その中で本研究は、社会生態学的要因である関係流動性によって、人間にとって主要な適応課題の一つである注目すべき他者からのフィードバックが異なるという可能性に注目し、その適応課題の違いによって成功時の自己意識的感情の適応価が左右されることを示した。よって、本研究は自己意識的感情の機

能と社会生態学的环境の両面に注目して理論を構築し、成功という同様の場面であっても、社会環境の性質に応じて適応的な感情が異なるという理論と、その実証的証拠を提出した点で意義がある。

2点目は、文化心理学に対する貢献である。本研究は特に、自己意識的感情の文化差に対して、感情の適応機能に注目することで、従来とは異なる説明を提供した。従来の自己意識的感情の文化比較研究では、文化的自己観や個人主義-集団主義といった、文化的共有信念や価値観の違いによる説明が試みられてきた (例えば、Kitayama & Uskul, 2011)。具体的には、北米を始めとした相互独立的文化では、誇りを含む、自己の独立性を際立たせる脱関与的対人感情が優勢だからだと説明されてきた。しかしその一方で、対人心理の文化差研究では、親密性や情熱的な愛といった他者とのつながりを強めるような感情経験は相互協調的文化の人々よりも相互独立的文化の人々の方が強いことが示されており、上記の文化的自己観理論からの説明と一貫しないという問題が指摘されてきた (Kito et al., 2017)。これに対して、本研究で提案した社会生態学的アプローチに基づく仮説は、良好な対人関係の獲得・維持という目標は人間に共通のものであるとしつつ、その適切な達成方法が関係流動性によって異なるという前提を置くことにより、自己意識的感情の文化差と、先行研究で見出された対人心理の文化差とを統一的に理解することを可能にした。

## 本研究の限界と今後の展望

本研究の限界は以下の5点である。1点目は、成功賞罰信念尺度の信頼性の低さである。本研究では、成功賞罰尺度を、成功賞3項目、成功罰3項目の二つの下位尺度で構成した。しかし、日本における成功賞尺度の信頼性係数は  $\alpha = .59$  と、十分に高いとは言えず、また誇りに関して予測した間接効果は有意傾向にとどまった。さらに、尺度の文化間測定不変性 (Milfont & Fischer, 2010) を確認したところ、成功罰尺度において強不変性が認められないなど、尺度項目数を増やすなどして内的整合性や異文化間妥当性をさらに改善させていく必要がある。

2点目は、代替仮説に関する検討の不足である。本研究は、これまでの自己意識的感情の文化差の説明として用いられてきた文化的自己観理論に対して、代替仮説として社会生態学的环境である関係流動性に注目した理論を提出した。しかし、本研究では別解釈である文化的自己観の測定及び媒介効果は検討していない。今後の研究では、本研究の理論と従来の理論の妥当性を比較するため、関係流動性のみでなく対立仮説に関しても、自己意識的感情の文化差への媒介効果を検討する必要がある。

3点目は質問紙による場面調査法であったことである。



本研究では、参加者に6つの人前での成功状況を想起してもらい、誇り経験・羞恥経験を予想して回答してもらった。しかし、社会的望ましさや、場面の想起によるバイアスがかかり、実際の誇り・羞恥経験をどこまで正確に測定できているかは明確ではない。今後の研究では、先行研究で用いられていたFACSコーディングによる感情表出の測定や(Feinberg et al., 2012; Lewis et al., 2010)、誇りととの関連が示唆されているテストステロン(例えば、Cheng & Kornienko, 2020)、羞恥感情との関連が見られるコルチゾール(Lewis & Ramsay, 2002)などの生理指標を測定する実験等により、感情経験や感情表出をより直接的に検討する必要がある。

4点目は、各社会において「適応的」であると本研究が想定した誇りと羞恥感情の経験が、その経験者に本当に高い適応度をもたらしているか、またその適応性は、どのような社会的相互作用を通じて達成されているのかが未検討なことである。今後の研究では、これらの自己意識的感情の経験によって生み出される行動の変化が、どのような社会的相互作用を通じて人々の適応度を左右するのかを、実証的に解明していく必要がある。

5点目は、本研究で用いた仮想的な場面が、人前での成功状況に限定されていたことである。本研究は、その状況で経験される自己意識的感情として、誇りと羞恥に注目し、その文化差の原因に対して適応論から説明を試みた。しかし、これらの場面は、日常生活で人々が誇りや羞恥を経験する状況を網羅しているわけではない。例えば、羞恥が経験される場面は、他にもプライベート状況での失敗や性的な状況など多様である(樋口他, 2012)。このような場面でも適応機能を持つのか、またそれはどのような社会的相互作用を通じて達成されているのかなどの未解明の問題については、今後の検討が待たれる。

### 利益相反について

なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

### 引用文献

- Adams, G., Anderson, S. L., & Adonu, J. K. (2004). The cultural grounding of closeness and intimacy. In D. J. Mashek & A. P. Aron (Eds.), *Handbook of closeness and intimacy* (pp. 321-339). Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- Barclay, P. (2013). Strategies for cooperation in biological markets, especially for humans. *Evolution and Human Behavior*, 34(3), 164-175. <https://doi.org/10.1016/j.evolhumbehav.2013.02.002>
- Birkett, M. A. (2013). Self-compassion and empathy across cultures: Comparison of young adults in China and the United States. *International Journal of Research Studies in Psychology*, 3(1), 25-34. <https://doi.org/10.5861/ijrsp.2013.551>
- Brown, J. D., & Marshall, M. A. (2001). Self-esteem and emotion: Some thoughts about feelings. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27(5), 575-584. <https://doi.org/10.1177/0146167201275006>
- Cassels, T. G., Chan, S., Chung, W., & Birch, S. A. J. (2010). The role of culture in affective empathy: Cultural and bicultural differences. *Journal of Cognition and Culture*, 10(3-4), 309-326. <https://doi.org/10.1163/156853710X531203>
- Cheng, J. T., & Kornienko, O. (2020). The neurobiology of human social behavior: A review of how testosterone and cortisol underpin competition and affiliation dynamics. In D. Granger & M. Taylor (Eds.), *Salivary bioscience* (pp. 519-553). Springer. [https://doi.org/10.1007/978-3-030-35784-9\\_22](https://doi.org/10.1007/978-3-030-35784-9_22)
- de Jong, P. J. (1999). Communicative and remedial effects of social blushing. *Journal of Nonverbal Behavior*, 23(3), 197-217. <https://doi.org/10.1023/A:1021352926675>
- Eid, M., & Diener, E. (2001). Norms for experiencing emotions in different cultures: Inter- and intranational differences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81(5), 869-885. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.81.5.869>
- Feather, N. T. (1989). Attitudes towards the high achiever: The fall of the tall poppy. *Australian Journal of Psychology*, 41(3), 239-267. <https://doi.org/10.1080/00049538908260088>
- Feinberg, M., Willer, R., & Keltner, D. (2012). Flustered and faithful: Embarrassment as a signal of prosociality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 102(1), 81-97. <https://doi.org/10.1037/a0025403>
- Frank, R. H. (1988). *Passions within reason: The strategic role of the emotions*. WW Norton & Co.
- (フランク, R. H. 山岸 俊男 (監訳) (1995). オデッセウスの鎖——適応プログラムとしての感情——サイエンス社)
- Harris, C. R. (2006). Embarrassment: A form of social pain: This enigmatic emotion likely evolved to smooth social interactions, but it can have less desirable consequences in the modern world. *American Scientist*, 94(6), 524-533.
- Hashimoto, H., & Yamagishi, T. (2016). Duality of independence and interdependence: An adaptationist perspective. *Asian Journal of Social Psychology*, 19(4), 286-297. <https://doi.org/10.1111/ajsp.12145>
- Hayes, A. F. (2017). *Introduction to mediation, moderation, and conditional process analysis: A regression-based approach*. Guilford publications.
- 樋口 匡貴・蔵永 瞳・深田 博己・照屋 佳乃 (2012). 非典型的状況における羞恥の発生メカニズム——ネガティブな行為が含まれない状況に関する検討——感情心理学研究, 19(3), 90-97. <https://doi.org/10.4092/jsre.19.90>
- Kawamura, Y., & Kusumi, T. (2020). Altruism does not al-

- ways lead to a good reputation: A normative explanation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 90, 104021. <https://doi.org/10.1016/j.jesp.2020.104021>
- Keltner, D., & Anderson, C. (2000). Saving face for Darwin: The functions and uses of embarrassment. *Current Directions in Psychological Science*, 9(6), 187–192. <https://doi.org/10.1111/1467-8721.00091>
- Keltner, D., & Gross, J. J. (1999). Functional accounts of emotions. *Cognition & Emotion*, 13(5), 467–480. <https://doi.org/10.1080/026999399379140>
- Keltner, D., & Haidt, J. (1999). Social functions of emotions at four levels of analysis. *Cognition & Emotion*, 13(5), 505–521. <https://doi.org/10.1080/026999399379168>
- 北村 英哉・大坪 庸介 (2012). 進化と感情から解き明かす社会心理学 有斐閣
- 北山 忍 (1995). 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, 10(3), 153–167. <https://doi.org/10.14966/jssp.KJ0000372467>
- Kitayama, S., Markus, H. R., & Kurokawa, M. (2000). Culture, emotion, and well-being: Good feelings in Japan and the United States. *Cognition & Emotion*, 14(1), 93–124. <https://doi.org/10.1080/026999300379003>
- Kitayama, S., Mesquita, B., & Karasawa, M. (2006). Cultural affordances and emotional experience: Socially engaging and disengaging emotions in Japan and the United States. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91(5), 890–903. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.91.5.890>
- Kitayama, S., & Uskul, A. K. (2011). Culture, mind, and the brain: Current evidence and future directions. *Annual Review of Psychology*, 62(1), 419–449. <https://doi.org/10.1146/annurev-psych-120709-145357>
- Kito, M., Yuki, M., & Thomson, R. (2017). Relational mobility and close relationships: A socioecological approach to explain cross-cultural differences. *Personal Relationships*, 24(1), 114–130. <https://doi.org/10.1111/pere.12174>
- Lange, J., & Crusius, J. (2015). The tango of two deadly sins: The social-functional relation of envy and pride. *Journal of Personality and Social Psychology*, 109(3), 453–472. <https://doi.org/10.1037/pspi0000026>
- Lewis, M., & Ramsay, D. (2002). Cortisol response to embarrassment and shame. *Child Development*, 73(4), 1034–1045. <https://doi.org/10.1111/1467-8624.00455>
- Lewis, M., Stanger, C., Sullivan, M. W., & Barone, P. (1991). Changes in embarrassment as a function of age, sex and situation. *British Journal of Developmental Psychology*, 9(4), 485–492. <https://doi.org/10.1111/j.2044-835X.1991.tb00891.x>
- Lewis, M., Takai-Kawakami, K., Kawakami, K., & Sullivan, M. W. (2010). Cultural differences in emotional responses to success and failure. *International Journal of Behavioral Development*, 34(1), 53–61. <https://doi.org/10.1177/0165025409348559>
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224–253. <https://doi.org/10.1037/0033-295X.98.2.224>
- Milfont, T. L., & Fischer, R. (2010). Testing measurement invariance across groups: Applications in cross-cultural research. *International Journal of Psychological Research*, 3(1), 111–130. <https://doi.org/10.21500/20112084.857>
- Miller, R. S. (1996). *Embarrassment: Poise and peril in everyday life*. Guilford Press.
- Miyamoto, Y., Uchida, Y., & Ellsworth, P. C. (2010). Culture and mixed emotions: Co-occurrence of positive and negative emotions in Japan and the United States. *Emotion*, 10(3), 404–415. <https://doi.org/10.1037/a0018430>
- Nisbett, R. E., & Cohen, D. (1996). *Culture of honor: The psychology of violence in the South*. Westview Press. (ニスベット, R. E.・コーエン, D. 石井 敬子・結城 雅樹 (編訳) (2009). 名誉と暴力——アメリカ南部の文化と心理—— 北大路書房)
- Oishi, S., & Graham, J. (2010). Social ecology: Lost and found in psychological science. *Perspectives on Psychological Science*, 5(4), 356–377. <https://doi.org/10.1177/1745691610374588>
- Parks, C. D., & Stone, A. B. (2010). The desire to expel unselfish members from the group. *Journal of Personality and Social Psychology*, 99(2), 303–310. <https://doi.org/10.1037/a0018403>
- Pleasant, A., & Barclay, P. (2018). Why hate the good guy? Antisocial punishment of high cooperators is greater when people compete to be chosen. *Psychological Science*, 29(6), 868–876. <https://doi.org/10.1177/0956797617752642>
- Semin, G. R., & Manstead, A. S. R. (1982). The social implications of embarrassment displays and restitution behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 12(4), 367–377. <https://doi.org/10.1002/ejsp.2420120404>
- Shariff, A. F., & Tracy, J. L. (2009). Knowing who's boss: Implicit perceptions of status from the nonverbal expression of pride. *Emotion*, 9(5), 631–639. <https://doi.org/10.1037/a0017089>
- Shariff, A. F., Tracy, J. L., & Markusoff, J. L. (2012). (Implicitly) Judging a book by its cover: The power of pride and shame expressions in shaping judgments of social status. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 38(9), 1178–1193. <https://doi.org/10.1177/0146167212446834>
- Silver, M., Sabini, J., Parrott, W. G., & Silver, M. (1987). Embarrassment: A dramaturgic account. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 17(1), 47–61. <https://doi.org/10.1111/j.1468-5914.1987.tb00087.x>
- Stoeber, J., Kobori, O., & Tanno, Y. (2013). Perfectionism and self-conscious emotions in British and Japanese students: Predicting pride and embarrassment after success and failure. *European Journal of Personality*, 27(1), 59–70. <https://doi.org/10.1002/per.1858>
- 菅原 健介 (1998). 人はなぜ恥ずかしがるのか——羞恥と自己イメージの社会心理学—— サイエンス社

- Sznycer, D. (2019). Forms and functions of the self-conscious emotions. *Trends in Cognitive Sciences*, 23(2), 143–157. <https://doi.org/10.1016/j.tics.2018.11.007>
- Sznycer, D., Al-Shawaf, L., Bereby-Meyer, Y., Curry, O. S., De Smet, D., Ermer, E., Kim, S., Kim, S., Li, N. P., Lopez Seal, M. F., McClung, J., O, J., Ohtsubo, Y., Quillien, T., Schaub, M., Sell, A., van Leeuwen, F., Cosmides, L., & Tooby, J. (2017). Cross-cultural regularities in the cognitive architecture of pride. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 114(8), 1874–1879. <https://doi.org/10.1073/pnas.1614389114>
- Sznycer, D., Takemura, K., Delton, A. W., Sato, K., Robertson, T., Cosmides, L., & Tooby, J. (2012). Cross-cultural differences and similarities in proneness to shame: An adaptationist and ecological approach. *Evolutionary Psychology*, 10(2), 147470491201000. <https://doi.org/10.1177/147470491201000213>
- Sznycer, D., Xygalatas, D., Agey, E., Alami, S., An, X.-F., Ananyeva, K. I., Atkinson, Q. D., Broitman, B. R., Conte, T. J., Flores, C., Fukushima, S., Hitokoto, H., Kharitonov, A. N., Onyishi, C. N., Onyishi, I. E., Romero, P. P., Schrock, J. M., Snodgrass, J. J., Sugiyama, L. S., ... Tooby, J. (2018). Cross-cultural invariances in the architecture of shame. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 115(39), 9702–9707. <https://doi.org/10.1073/pnas.1805016115>
- Thomson, R., Yuki, M., Talhelm, T., Schug, J., Kito, M., Ayanian, A. H., Becker, J. C., Becker, M., Chiu, C., Choi, H.-S., Ferreira, C. M., Fülöp, M., Gul, P., Houghton-Illera, A. M., Joasoo, M., Jong, J., Kavanagh, C. M., Khutkyy, D., Manzi, C., ... Visserman, M. L. (2018). Relational mobility predicts social behaviors in 39 countries and is tied to historical farming and threat. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 115(29), 7521–7526. <https://doi.org/10.1073/pnas.1713191115>
- Tracy, J. L., & Matsumoto, D. (2008). The spontaneous expression of pride and shame: Evidence for biologically innate nonverbal displays. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 105(33), 11655–11660. <https://doi.org/10.1073/pnas.0802686105>
- Tracy, J. L., Mercadante, E., Witkower, Z., & Cheng, J. T. (2020). The evolution of pride and social hierarchy. In B. Gawronski (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 62, pp. 51–114). Elsevier. <https://doi.org/10.1016/bs.aesp.2020.04.002>
- Tracy, J. L., & Robins, R. W. (2007). The psychological structure of pride: A tale of two facets. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92(3), 506–525. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.92.3.506>
- Tracy, J. L., Shariff, A. F., & Cheng, J. T. (2010). A naturalist's view of pride. *Emotion Review*, 2(2), 163–177. <https://doi.org/10.1177/1754073909354627>
- Uskul, A. K., & Oishi, S. (2020). Editorial overview: What is socio-ecological psychology? *Current Opinion in Psychology*, 32, 181–184. <https://doi.org/10.1016/j.copsyc.2020.01.001>
- van Osch, Y., Zeelenberg, M., Breugelmans, S. M., & Brandt, M. J. (2019). Show or hide pride? Selective inhibition of pride expressions as a function of relevance of achievement domain. *Emotion*, 19(2), 334–347. <https://doi.org/10.1037/emo0000437>
- Williams, L. A., & DeSteno, D. (2008). Pride and perseverance: The motivational role of pride. *Journal of Personality and Social Psychology*, 94(6), 1007–1017. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.94.6.1007>
- 山田 順子・鬼頭 美江・結城 雅樹 (2015). 友人・恋愛関係における関係流動性と親密性——日加比較による検討—— 実験社会心理学研究, 55(1), 50–59. <https://doi.org/10.2130/jjesp.1409>
- 山岸 俊男 (1998). 信頼の構造——こころと社会の進化ゲーム—— 東京大学出版会
- Yamagishi, T., Hashimoto, H., & Schug, J. (2008). Preferences versus strategies as explanations for culture-specific behavior. *Psychological Science*, 19(6), 579–584. <https://doi.org/10.1111/j.1467-9280.2008.02126.x>
- Yamagishi, T., Jin, N., & Miller, A. S. (1998). Collectivism and in-group bias. *Asian Journal of Social Psychology*, 1(3), 315–328. <https://doi.org/10.1111/1467-839X.00020>
- Yamagishi, T., & Yamagishi, M. (1994). Trust and commitment in the United States and Japan. *Motivation and Emotion*, 18(2), 129–166. <https://doi.org/10.1007/BF02249397>
- 山本 翔子・結城 雅樹 (2019). トロツコ問題への反応の文化差はどこから来るのか? ——関係流動性と評判期待の役割に関する国際比較研究—— 社会心理学研究, 35(2), 61–71. <https://doi.org/10.14966/jssp.1733>
- Yuki, M., & Schug, J. (2012). Relational mobility: A socio-ecological approach to personal relationships. In O. Gillath, G. Adams, & A. Kunkel (Eds.), *Relationship science: Integrating evolutionary, neuroscience, and sociocultural approaches* (pp. 137–151). American Psychological Association. <https://doi.org/10.1037/13489-007>
- Yuki, M., & Schug, J. (2020). Psychological consequences of relational mobility. *Current Opinion in Psychology*, 32, 129–132. <https://doi.org/10.1016/j.copsyc.2019.07.029>
- Yuki, M., Schug, J., Horikawa, H., Takemura, K., Sato, K., Yokota, K., & Kamaya, K. (2007). Development of a scale to measure perceptions of relational mobility in society. 北海道大学社会科学実験研究センター CERSS Retrieved December 22, 2022, from <https://lynx.let.hokudai.ac.jp/cerss/workingpaper/2007.html>